

日本IT書紀

033 火事場泥棒

03 未剖篇
卷之四 曙光

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第三十三

火事場泥棒

一

前節を書いていて筆者は、日中戦争が始まる前の時代を描いているような錯覚にとらわれた。朝鮮、満州、満鉄、フィリピン、ハワイ、仮想敵といった言葉が続くためであるうけれど、だが間違いなく時代は明治なのである。

そしてもう一つ間違いなことは、日中戦争とそれに続く太平洋戦争の遠因は日露戦争ないしポーツマス条約の後に、ひっそりと仕込まれていたということである。

ここで筆者はこの書籍の主旨に立ち返って、計算機の話に戻ることを欲するのだが、そのことを語るには一九一四年から十年間の出来事、すなわち第一次大戦の前後を見ておかねばならない。

一九一四年（大正三）の六月、ボスニアの州都・サラエボでセルビアの二人の民族主義者がオーストリア・ハンガリー帝国の皇太子夫妻を暗殺する事件が発生した。史上いうところの「サラエボ事件」である。その報復としてオース

トリア・ハンガリー帝国がセルビアに宣戦を布告し、オーストリア・ハンガリー帝国と協定を結んでいたドイツ帝国も八月に参戦した。

これに対してセルビアを支援していたロシアがオーストリア帝国とドイツ帝国に宣戦を布告、するとドイツ帝国はロシアと協調関係にあったフランスに対して宣戦を布告した。実力拮抗の国々が協商協定で手を組んでいたために、ドミノ倒しのように宣戦布告が連鎖した。

ドイツ帝国軍はベルギーを通過してフランスに侵入した。このときから戦争の主導権はドイツ帝国が握ることになった。

「フランスと戦うには、貴国を通過せざるを得ない」というドイツ帝国の言い分は、国際的に通用しなかった。

フランスばかりか、イギリスまでもがドイツ帝国に宣戦を布告し、またたくうちに戦火がヨーロッパ全土に広がった。騎虎の勢で進軍したドイツ帝国軍だったが、東からロシアの圧力を受けて進軍を停止した。

戦線が膠着し、両陣営は局地戦から陣地戦に移っていく。レマルクの小説『西部戦線異状なし』が描くのは、このときの事情である。

この戦争は従来の大砲と馬と兵隊による人海戦術の決戦方式から、毒ガスや戦車、飛行機といった新兵器に代表さ

れる科学・工業技術の物量戦に転換した。総合的な生産力が勝敗を決めるようになった。

日本政府はヨーロッパで始まったこの戦争を、千載一遇のチャンスととらえていた。中心となったのは、外相・加藤高明である。

彼には明確な見通しがなかったが、

「参戦すべきである」

直感的にそう考えた。

加藤がそう考えたのには、一応の理由があった。

日本は日露戦争の戦費を国債でまかなった。そのため、政府は二十五億円を超える巨額の国債未償還金を抱えていた。増税と外資の導入でからも表向きを取り繕っていたものの、金の保有高が底をつき、新たな市場を獲得しなければ経済が破綻するところに追い詰められていた。

一九一四年の八月四日、ドイツ帝国に宣戦を布告したイギリス政府に対して、加藤は駐英日本大使館を通じて、

「同盟国として対独宣戦を布告すべきか」

を質問した。

その回答は、

「イギリスは極東への戦火の拡大を希望しない」

というものだった。

ところが七日にいたって、イギリス政府から

「支那海におけるドイツ帝国の武装商船を、日本帝国海軍の力をもって撃滅してほしい」

という要請が届けられた。

ただちに加藤が首相・大隈重信に意見を具申すると、大隈はいった。

「あとのことはあとのことだ」

イギリスの要請があったことにしてドイツ帝国と戦争を始めておけば、あとはどうにでもなる、という意味だった。大隈と加藤の方針を聞いた元老の山県有朋は、

「武装商船だけに限ることはあるまい。青島を攻めるのが当然ではないか」

とぶち上げた。

「青島」は中国・山東半島の「チンタオ」のことである。

青島はドイツ帝国の極東における本拠地だった。

参戦がこれで決まった。

二

山県有朋の意見は、軍略としては正しかった。

ところが、ただちに青島を攻撃することはできなかった。

青島はドイツ帝国が中国政府から租借しているに過ぎず、中国の領土である。攻撃を行うには中国政府の了解を取ら

なければならぬ。

日本政府からの申し入れを受けて中国大總統・袁世凱はイギリスに

「日本の突出を抑制するよう、頼む」と要請した。

それでイギリス政府は日本政府に対して

「行動は海上貿易の安全確保に専念されたい」

とする要望を發した。東洋の駄々っ子が火遊びをされてはたまらん、と言いたかつたに違いない。

だが加藤は譲らなかつた。

日本が参戦するに当つては、イギリス、中国、日本の間で行きつ戻りつのやり取りがあつた。

結局、日本のゴリ押しが通つて、八月二十三日にドイツ帝国に宣戦を布告、九月二日に日本陸軍が山東省竜口上陸を開始して山東半島を占領し、次いで十月十四日まで日本海軍が赤道以北のドイツ帝国領南洋諸島の占領を完了した。

対独宣戦は、その本拠地・青島を占領した時点で終結すべきであつた。

そもそも第一次大戦に参戦する正当な理由を日本は持つていながつたし、仮に日英同盟を根拠とする出兵であつたにせよ、山東半島からドイツ帝国の勢力を一掃するに當つ

ては、日英中の三国間で

「中国政府に還付する目的で」

という条件が合意されていたのである。

ところが日本軍はそのまま山東半島に居座り、同地最大の資産である山東鐵道を占有した。

——約束と違ふではないか。

袁世凱は、

「山東半島からの速やかな撤兵を望む」

という声明を出した。

これに対して駐華公使・日置益が中国政府に手渡したのは二十一か条からなる要求だつた。二十一か条要求の骨子は、山東省と南滿州における日本の經濟的權益の確保にあつて、旅順・大連の租借期限を九十九年に延長するなど、一方的な内容だつた。

西歐列強が戦争に忙殺されている間に滿州における利権を確保・拡大しようと画策しようとする意図は明らかだつた。袁世凱はアメリカ政府が仲介してくれることに期待したが、アメリカ政府の関心はヨーロッパ戦線の成り行きにあつた。このため袁世凱は日本政府の強硬な姿勢に屈さざるを得なかつた。

五月二十五日、袁世凱は不承不承で日本政府との間で調印を取り交わしたが、これが中国における反日感情の遠因

となった。それだけでなく、日本は国際的に「火事場泥棒」の非難を受け、西欧列強が日本に対して猜疑心を抱ききつかけとなった。アメリカでは排日運動が起こっている。

だが、一般国民は

「勝った、勝った」

で沸きあがっていた。

日清、日露と、日本軍は向かうところ敵なしの勢いで、戦争に勝つたびに領土が広がっていった。この二つの戦争で日本は台湾を得、朝鮮を植民地とし、南満州に租借地を持った。

具体的にいえば、一八七五年（明治八）にロシア政府と千島・樺太交換条約を結んだとき、日本の領地面積は約三十八万平方キロメートルだった。それから三十年後の一九〇五年（明治三十八）には、二・三倍の八十八万平方キロメートルになっていた。維新からわずか三十年で、大日本帝国が形成されたのだった。

ここでまた新しい戦争に勝ったことで、日本はドイツ帝
国が領有していた南洋諸島をも統治することになり、また
中国政府に突きつけた二十一か条要求で、山東半島の租借
も可能になった。

戦後処理をめぐるベルサイユ講和会議に日本は戦勝国として出席したのみならず、イギリス、フランス、イタリア、

アメリカと並ぶ「五大強国」の一国に列したのである。ただしこのことが欧米列強諸国から嫉みを買ひ、中国、朝鮮の人民に恩讐を抱かせた。だけでなく、その版図を維持するのに、大日本帝国の実力は追いついていなかった。

三

産業界はこの戦争をどうとらえたか。

ヨーロッパ全土に戦火が広がったというニュースが流れたとき、まず株価が暴落した。次いで紡績業界に不況風が起った。

一九一四年九月二日、全国蚕糸同業者協議会が操業短縮を決定し、十四日には生糸相場が暴落した。大阪・北浜銀行が支払いを停止したことから大阪証券取引所と大阪米穀市場が休業し、次いで東海地方の銀行で取り付け騒ぎが発生した。

金融不安は全国に飛び火し、周陽銀行（山口県）、村上銀行（広島県）、五泉銀行（新潟県）が休業、八十五銀行（埼玉県）、昌平銀行（東京都）が支払停止、東海商業銀行（愛知県）が破綻した。政府は日銀を通じて総額二百五十万円の緊急融資を行うとともに、蚕糸業救済のために帝國蚕糸会社を設立して買入れを保証しなければならな

った。また米価の低落を防止するために「米価調節令」を交付したが、大きな効果は得られなかった。

当初は戦争の経済効果に否定的だった産業界は、政府の金融緩和策を機にやや投資が回復し、加えてドイツの潜水艦による貨物船の運賃高騰や、アジア地域におけるイギリス製紡績製品の流通停滞などを背景に、じりじりと上昇に転じた。一九一五年十二月にいたってヨーロッパ戦線の膠着化がはつきりしたとき、株価が暴騰した。「大戦景気」が始まった。

このかつてない好景気に、多くの「成金」が誕生し、その中の何人かがのちの国内産業の基盤を形成していくことになる。そのことは後述する。

大戦景気は一九一八年いっぱいまで、丸三年継続した。この間に造船業、海運業が隆盛し、鉄工業が盛んになった。紡績業は空前の好況を迎え、製陶業、鋳工業、林業、商業が繁栄した。社会的な現象としては「サラリーマン」が誕生した。田園調布や軽井沢別荘地の形成、都市における消費経済の進展などもこの時期のものだった。

大本寅治郎が鉄工所の経営を近代化しようと思いつき、事務能率の向上のために計算機が必要と考え、あるいは舶来の事務機器が飛ぶように売れたのは、こうした都市型経済の発展によっていた。

一九一七年の十二月にロシアがドイツ帝国と単独講和を結んだとき、実業家や投資家の多くは、それはロシアの内政事情であるに過ぎないと考えた。

ロシア帝国では同年三月に革命が起きていた。ニコライ二世が退位し、さらに十月にはペトログラード武装蜂起の勝利でロシア帝国が斃れ「ソヴィエト」が誕生した。革命による政治的、経済的混乱を抱え、誕生したばかりのソヴィエト連邦政府はドイツとの戦争にかまけている余裕がなくなつた。

しかし戦争はなお長期化する様相を呈していた。

六月にアメリカが参戦し、タイや中国も対独宣戦を布告していた。連合国軍の圧力は急速に強まっていた。いずれドイツ帝国とオーストリア帝国が降伏することは目に見えていた。だが、

——戦争が終わっても、ヨーロッパ諸国が復興するには相当の時間がかかるだろう。

と多くの人が考えた。

——民需品を中心に物資の不足が慢性化し、加えて復興のための新しい需要が発生する。

と予測された。政府も経済界も、戦後経済への危機感は薄かった。

実際のところというと、この予想は半分外れ、半分は当

つていた。

予想が外れた原因の一つは、「シベリア出兵」だった。寺内正毅内閣が一九一八年一月に実施した軍艦二隻のウラジオストック派遣がそれである。

名目は

「居留民の保護」

だったが、ロシアの混乱に乗じてシベリアに橋頭堡を確保し、満州の権益を拡大しようと企てたのは明らかだった。産業界はこの出兵を支持しなかった。対独宣戦布告と対華二十一条要求で山東半島を獲得したとはいえ、新規の投資は同地にこそ集中すべきだった。ここに北部満州まで加えるには、経済・軍事の総合力から無理があった。さらに良識ある穏健な産業人は、国内で拡大しつづつあった貧富の格差是正と物価の安定、工場就労者への待遇改善など「内治」を重視すべきだと考えていた。

一九一八年七月七日、ドイツが西部戦線で大敗した。八月二日、連合国軍がアルハンゲリスクに上陸した。共産革命の崩壊をねらったイギリスやアメリカが一時的に占領したのである。

九月に入ってドイツ政府は連合国との講和に積極的な姿勢を示し、同月末にブルガリアが連合軍に単独降伏した。十月二十八日、ドイツ海軍で反乱が起き、これが引き金と

なって翌十一月九日にドイツ帝国が瓦解した。戦争状態に全面的な終止符が打たれたのは十一月十一日である。

戦争終結のニュースが流れると、まず海運業が打撃を受けた。

一九一八年に大型船の賃借料は一トン当り四十七円だった。これが翌一九一九年の一月には二十九円に下落し、三月には十円にまで下がってしまった。海の航行に安全が保証されたのだから、当然といえば当然だった。福井や金沢などの和服問屋が過剰在庫を抱えて倒産し、三月には鉄、銅、綿製品などが暴落した。ここまでは「予想が外れたうち」である。

一九一九年四月を境に状況が一変した。生糸や綿製品などの対米輸出が回復し始めたのだ。予想した通り、ヨーロッパ諸国はやはり簡単には復興しなかった。再び日本経済は上昇気流に乗り始めたが、大規模な戦争が終結したために工場の拡張計画は見直され、安定成長路線が選択されていく。

ただし、株式相場だけは違っていた。余剰した資金が株式市場に流入し、有望株への投機が行われた。「戦後景気」と呼ばれる好況は、一九八〇年代末から九〇年代初頭に発生したバブル景気とよく似ている。実態としては、内部に労働運動や農村の貧困、輸入超過に

よる金保有高の減少といった問題をかかえていたにもかかわらず、株や不動産が高騰した。

投機に走ったのは投資家だけではなかった。一般庶民でさえ、銀行から借りた金を投機に回し、実業が疎かになった。借金を集めて膨らんだ投機は、必ず破綻するのである。

補注

サラエボ事件 オーストリア皇太子(皇帝フランツ・ヨーゼフの弟カール・ルートヴィヒ大公の長子) フランツ・フェルディナント (Franz Ferdinand von Habsburg-Johring 1863-1914) は陸軍総監として陸軍の演習を視察するために、ショテク妃とサラエボを訪れた。サラエボ駅から市庁舎に向かった自動車に爆弾が投げられたが、ここでは従者三人と市民が負傷したにとどまった。歓迎式典を終えた皇太子夫妻は負傷した従者を見舞うために病院に向かい、その途中、ピストル二発が発射され夫妻は間もなく絶命した。

フェルディナント皇太子はオーストリア帝国におけるドイツ人とマジヤール人による支配がスラブ系市民の不満を助長していると考え、ドイツ人、マジヤール人、スラブ人が相互に補充する「三元主義」を唱えていた。ところがスラブ系市民にとってその提案は、汎ゲルマン主義にスラブ人を取込む施策と受け取られた。

ドイツ帝国 一八七〇年八月、フランスのナポレオン3世との戦争に勝ったプロシアは、翌七一年ヴィルヘルム1世が即位して「ドイツ帝国」と称した。以後、ドイツは帝政崩壊、ナチスの台頭など激しく変化する。本書では帝政時代を「ドイツ帝国」、一九一八年から三二年までを「ドイツ共和国」、ヒトラー内閣が成立した三年から四五年までを「ナチス・ドイツ」と呼んで区別する。ちなみにヴィルヘルム1世は一九一八年十一月九日に退位して帝政に幕が下ろされた。

レマルク Erich Maria Remarque / 1898-1970。ナチ

ス・ドイツによる反戦主義者弾圧により三二年にスイスに逃れ、三八年ドイツ国籍を剥奪されたのを機にアメリカ合衆国に亡命した。アメリカで四一年『汝の隣人を愛せ』、四六年『凱旋門』を発表するなど平和主義に基づく文筆活動を展開した。

西部戦線異状なし レマルクの小説。一九一六年、ギムナジウムの級友とともに出征し、西部戦線へ配属された体験をもとに、二九年に発表した。

袁世凱 Yuan Shikai / えん・せいがい / 1895-1916。河南省項城に生まれ、科挙の試験に二度落ちたため官吏を諦めて軍人となった。一八八二年朝鮮の壬午騒乱で大院君を天津に幽閉し、四四年には朝鮮甲申事変を鎮圧した。新建陸軍の責任者に抜擢され、義和團事件鎮圧で列国に知られた。一九〇一年直隸総督兼北洋大臣、清王朝滅亡後、中華民国第二代臨時大統領に就任した。一六元旦に皇帝の地位に就き、国号を中華帝国と改めたが、三か月で帝位を取り消し、その三か月後に急死した。

日置 益 ひおき・えき / 1861-1926。一八八八年東京帝国大学法科大学法律学科を出て外務省に入った。一九一四年中国公使に就任した。対華二十一か条要求の交渉を担当した。

ソビエト Совет…ロシア語で「評議会」を意味する。ロシア革命においてマルクス主義者もしくはマルクスレーニン主義の理論の下で組織された労働者の会議を指した。したがってソビエトは革命後のソビエト連邦ばかりでなく、中国共産党でも組織された。

アリハンゲリスク Arkhangelsk: 「戦う大天使」アルハンゲリ」に由来する。ロシア北西部、白海に注ぐ北ドヴィナ川の河口近くの都市。

日本IT書紀 033 火事場泥棒

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。